

29 障害福祉サービスにおける発達障害者への就労支援モデル考案の試み

自立支援局 小林菜摘・四ノ宮美恵子・遠藤明宏

1. はじめに

国立障害者リハビリテーションセンターで実施した「青年期発達障害者の地域生活移行への就労支援に関するモデル事業（以下、モデル事業）」では、「施設内訓練」「行事参加」「職場実習」の3つの体験場면을支援のフィールドとし、「働くために（就労）」という統一した支援の文脈設定のもと、「自己理解」「他者理解」「社会的規範の理解」を体験的に理解することを下位目標とした、らせん状の支援プログラム（図1参照）を試行してきた。それらを、障害福祉サービスにおける発達障害者の就労支援の1モデルとして考案した。本研究では、事例検討による就労支援モデルの有用性を検証することを目的とした。

2. 方法

(1) 事例概要

モデル事業利用者A。男性。20代前半。DMS-IVによる診断名は、特定不能の広汎性発達障害で、WAIS-IIIの結果はVIQ=96、PIQ=79、FIQ=87であった。また最終学歴は大学卒業で、アルバイトを含む就労経験を有していなかった。訓練開始時においては、就労を希望するという発言はあったものの、就労への動機付けを持っていなかった。

(2) 手続き

就労支援モデルの検証にあたっては、利用開始から15ヶ月の支援期間を、表1のように支援における主たる体験場面の設定に沿って5つの過程に区分した。そして、訓練の一環として、一ヶ月毎に支援過程における振り返りを記述してもらった作文をもとに、各期毎の作文の記述から、単なる事実の記述を除外した語りを文章単位で抽出し、KJ法の手順に則ってカテゴリー化した。（グルーピング、カテゴリー化に関しては、支援場面に関与していない心理職に依頼した。）

なお、個人情報保護のため、事例の特性を理解する上で支障のない範囲で、個人が特定されるおそれのある記述については除外した。

(3) 結果

手続きに示した手順に従って、作文から単なる事実の記述を除外した語りを文章単位で抽出した結果、語りの総数は109個であった。それらは、表2のようなカテゴリーに分類された。

(4) 考察

KJ法に則って作文における語りを分析した結果、本事例においては、支援モデルの下位目標である「自己理解」「他者理解」「社会的規範の理解」に関する体験的理解が得られたことがうかがわれた。

このことから、「施設内訓練」「行事参加」「職場実習」の3つの体験場面による支援を通して、社会的文脈における各下位目標に関して肯定的変化が見られたと考えられ、就労支援モデルの有用性が検証された。

さらに、支援事例を積み上げて、就労支援モデルの有用性の検証を行うことが今後の課題である。

図1 就労支援モデル

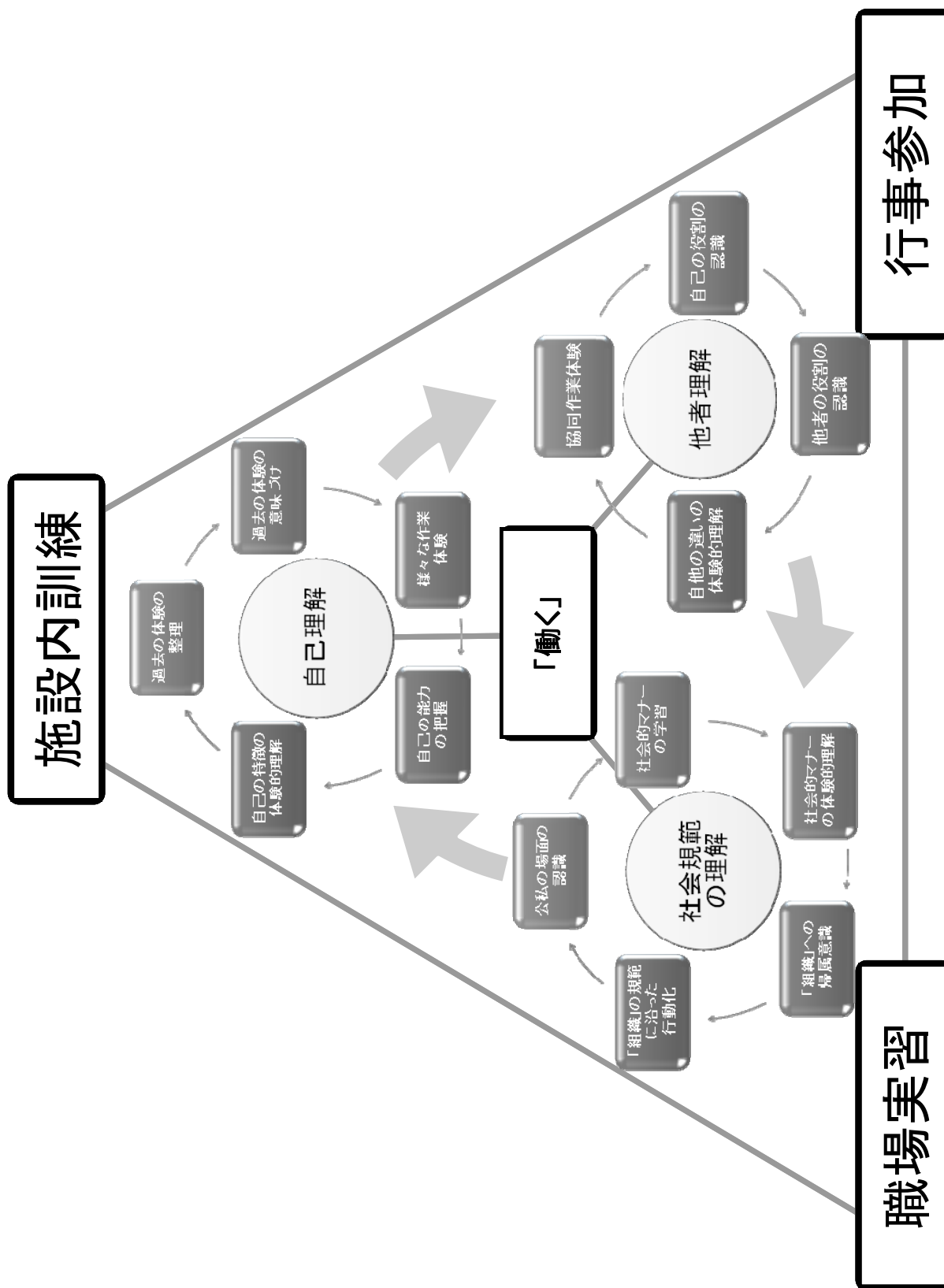


表1 訓練段階の区分と訓練内容

区分	期間	体験場面	訓練項目	主な訓練内容	支援モデルにおける下位目標
第1期	0ヶ月～3ヶ月	施設内訓練	・アセスメント	・作業評価 ・保護者同席による生育歴の聞取	・自己の能力の把握 ・過去の体験の意味付け
			・基本的労働習慣を整える	・就労規則の理解 ・生活習慣の改善	・公私の場面の違いの認識 ・自分の特徴の体験的理解
			・作業訓練	・個別の事務補助系の作業	・自分の特徴の体験的理解
				・個別の作業系の作業	・自分の特徴の体験的理解
第2期	4ヶ月～8ヶ月	行事への参加	・体育祭	・競技への参加	・自己の役割の認識
				・チームの応援をする	・他者の役割の認識
			・おもてなしの体験	・招待状の作成	・社会的マナーの学習
				・お茶会の開催	・社会的マナーの体験的理解
			・文化祭	・文化祭の企画	・自己の役割の認識
				・文化祭の準備	・協同作業体験
				・文化祭の運営	・他者の役割の認識
・文化祭のまとめ	・自他の違いの体験的理解				
第3期	9ヶ月～11ヶ月	職場実習	・職場実習	・物流系の職場実習	・社会的マナーの体験的理解
				・事務補助の職場実習	・「組織」の規範に沿った行動化
				・作業系の職場実習	・公私の場面の違いの認識
第4期	12ヶ月～13ヶ月	施設内訓練	・職場実習の振り返り	・実習の総合評価、課題の整理	・自己の能力の把握
			・グループ訓練	・協同での作業訓練	・「組織」への帰属意識
			・社会的マナーの学習	・社会科見学	・社会的マナーの体験的理解
			・模擬職場訓練	・社会的規範を重視した作業訓練	・「組織」の規範に沿った行動化
第5期	14ヶ月～15ヶ月	就職活動	・履歴書作成	・自分の経歴を整理する	・過去の体験の意味付け
			・自己紹介状作成	・自分の特徴を整理する	・自己の特徴の体験的理解
			・面接練習	・相手に伝える練習をする	・自他の違いの体験的理解
			・就職活動	・就職活動	・「組織」の規範に沿った行動化

表2 各支援過程において抽出されたカテゴリー

区分	カテゴリー	区分	カテゴリー
第1期	自己に対する過大評価	第4期	社会的規範の体験的学習
	他者に対する過度な要求		他者との能動的な関わり
第2期	他者との受身の関わり		他者との意志疎通の困難さへの言及
	他者への肯定的関心		内省
	主観的事実と客観的事実の乖離からくる戸惑い		具体的な自己の課題設定
限定的な近未来への展望	体験から拡大した希望		
第3期	社会的規範の認知	第5期	自己の客観的評価
	社会的対応の必要性の認識		自己の特徴への関心
	自己の成長への気づき		自立への言及
	漠然とした自己の課題設定		就労に向けた自発的な課題設定
	漠然とした将来像への言及		日常生活における自発的な課題設定